



|                  |                                                                                       |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 飛碟の夢、未知との遭遇 : 1980年代中国のUFO連環画を読む                                                      |
| Author(s)        | 中根, 研一                                                                                |
| Citation         | 連環画研究, 10, 86-107                                                                     |
| Issue Date       | 2021-09-30                                                                            |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/2115.98496">https://doi.org/10.14943/2115.98496</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/98496">https://hdl.handle.net/2115/98496</a>     |
| Type             | departmental bulletin paper                                                           |
| File Information | renkanga_10_86-107.pdf                                                                |



# 飛<sup>ひ</sup>碟<sup>ちよう</sup>の夢、未知との遭遇 ——1980年代中国のUFO連環画を読む

中根 研一

## 1. 連環画『UFO——空飛ぶ円盤の謎』

### 1-1 アバンタイトル

本稿でまず紹介するのは、王曉明編文（表紙も）、梁平波絵画『UFO——空飛ぶ円盤の謎<sup>1</sup>』（浙江人民美術出版社、1980）

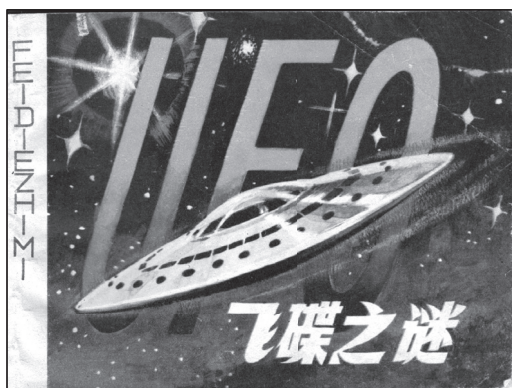
である。タイトルにある「空飛ぶ円盤」は、原題では「飛<sup>フレイディエ</sup>碟」で、これは英語の「Flying Saucer<sup>2</sup>」を直訳した中国語である。UFO（Unidentified Flying Object）とはそもそも「未確認飛行物体」という意味であるが、本稿では人々が宇宙人の乗り物（エイリアン・クラフト）と考える物を指す用語としても UFO という呼称を使用することにする。また特に断り書きのない場合、便宜的に「飛碟」を「UFO」と訳している。

改革開放が始まり、海外からバラエティに富んだ未知の情報が流入するようになっていた1980年当時の中国では、UFO もちょっとしたブームとなっており、これもそのまっただ中で生まれた一冊である。表紙も典型的な円盤型 UFO だ。

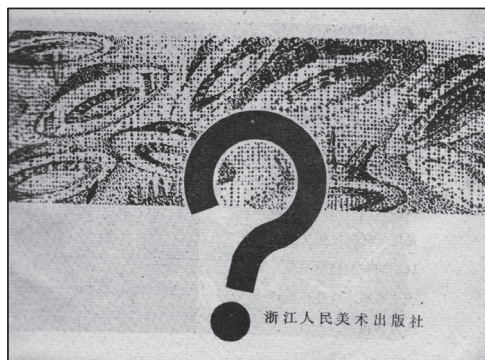
原作も絵も中国人の手によるものだが、舞台はオーストラリアで、作中に中国も中国人も登場しない。そして、伝説紹介や回想シーンを除き、本編中には本物の UFO や宇宙人すら出てこない。SF 作品どころか、UFO を金儲けに利用しようとする当時の資本主義社会の人々を描いた、一種の風刺作品になっている。

まずは本作のストーリーを紹介していこう。

ページを開くとタイトルは現われず、UFO と「？」マークがあるのみ。物語もすぐには始まらず、まずは番号ではなく「A～D」と

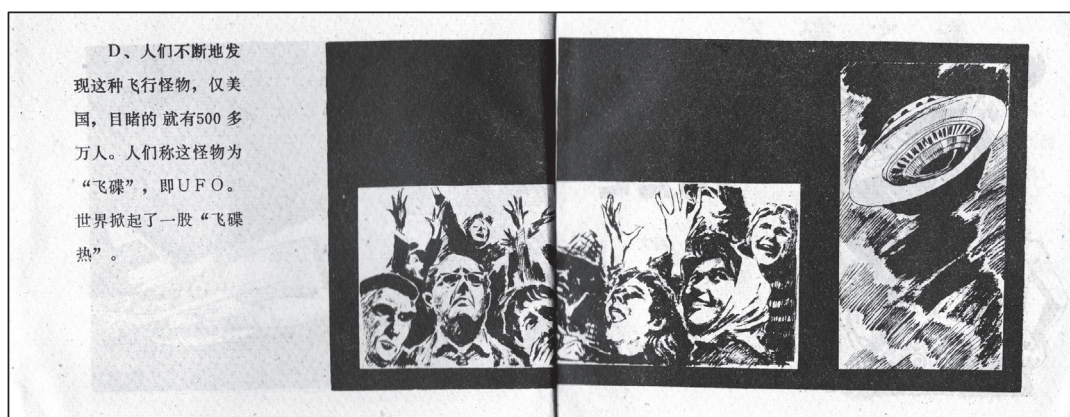


『UFO——空飛ぶ円盤の謎』表紙。



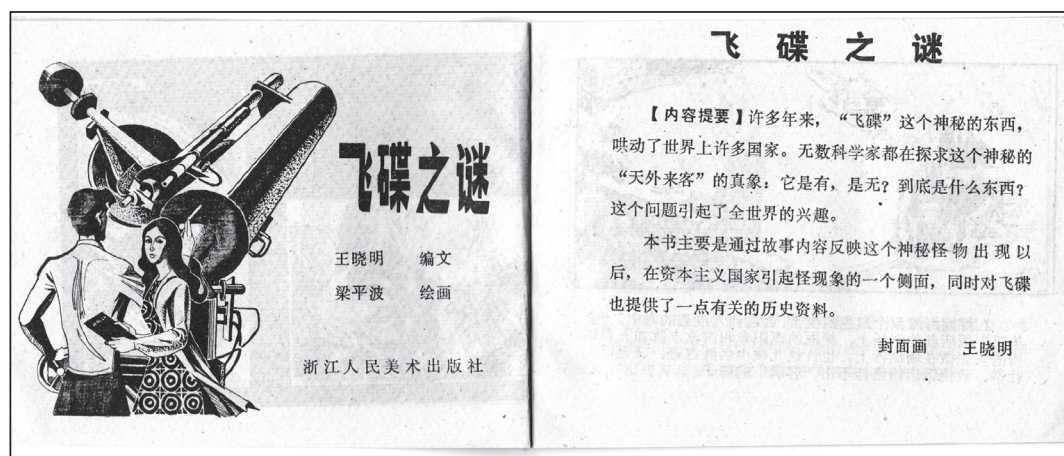
同屏絵。タイトルがない？

振られた左右見開きのページにまたがるイラストを配置して、過去の世界における有名な UFO 事件が紹介されていく。Aは、1883 年 8 月 12 日にメキシコのサカテカス天文台の天文学者が、太陽を観測中に 283 個の謎の発光体が太陽の表面を横切るのを発見したエピソード。Bでは 1948 年 7 月 1 日（実際は 1 月 7 日）にアメリカはケンタッキー州で発生した、UFO 追跡中の空軍機が撃墜され、パイロットが死亡した所謂「マンテル大尉事件」の話。Cは 1976 年 8 月 9 日にイラン空軍の戦闘機が未確認飛行物体を追跡し、一時操縦不能に陥ったエピソード<sup>3</sup>。ここまでは、いずれも現実世界で「事実」として語られている事件である。



左右見開きで描かれた、UFO に熱狂する人々（Dページ）。

最後のDページで、空を見上げて熱狂する世界各地の人々と、空飛ぶ円盤のイラストを並べ、このように説明する。「人々は絶えずこのような飛行怪物を発見してきており、アメリカだけでも目撃者は 500 万人以上もいる。人々はこの怪物を「飛碟」と呼ぶ、すなわち UFO である。世界中で「UFO 熱」が巻き起こったのである<sup>4</sup>」。



世界の UFO エピソード紹介 A～D の後によりやく現われる作品タイトルと前書き（内容紹介）。

そして、ようやく次のページに見開きで書名と作者と絵師の名前がクレジットされるのである。A～D のページは、さながら映画やドラマのアバンタイトルようだ。次の「内容提要」には、このようにある。

長年、「空飛ぶ円盤」というこの神秘の物体は世界中の多くの国家を騒がせてきた。数知れぬ科学者達が、この神秘の「天外からの来客」の真相を探求し続けている。それはありや、なしや？ いったい何者なのか？ その問題は全世界の興味を引きつけてやまない。

本書は主に物語内容を通じて、この神秘の怪物出現以降、資本主義社会で引き起こされた怪現象の一側面を反映し、同時に空飛ぶ円盤に対してもいささか関連ある歴史的資料を提供するものである<sup>5</sup>。

この物語は、当時の中国人の目に映った西側資本主義社会における UFO 騒動を描いているというわけだ。

## 1-2 若き青年科学者と古老の対話

物語は有名なリゾート地、オーストラリアのパームビーチから始まる。「ゴールデン・ウール・ホテル」前の海水浴場は、色とりどりのビーチパラソルや水着姿の観光客で賑わっていた。

そこへ花と土産物を売りにやって来た物語のヒロイン、メキシコ人の血を引く少女マーガレットは、突如現われた凶暴な犬達の襲撃に遭ってしまう。その危機を救ってくれた青年こそ、物語の主人公である物理学者のウィリアム・ロット<sup>6</sup>その人であった。ロットはマーガレットが落とした品物の中に、円盤状の彫刻を見つけ、興味を示す。彼女曰く、祖父が作ったものだという。

彼女に頼んで祖父に会わせてもらったロットは、彼から「それ[円盤]の名前は「ラムラム」といい、わたらの部族の史詩の中では悪魔の化身じゃ……」という話を聞かされる。それによると、彼らの部族がかつてマヤ帝国と戦争をした際、上空に突然その怪物が現われるとにわかに砂嵐が巻き起こり、その機に乗じたマヤ帝国軍に打ち滅ぼされたのだという。その後、マヤ帝国はその怪物を守護神として崇め奉り、戦旗にまでその怪物を刺繍していたが、彼らもまた滅亡してしまった<sup>7</sup>。



青年物理学者のロットは、マーガレットの祖父から円盤の伝説を聞かされる。

なぜこんな話に興味があるのかと尋ねられたロットも自分の身分を明かし、半年前に体験したUFO遭遇事件のエピソードを披露し始める。

それは1月25日のこと。友人のソーヤと野外調査中だったロットは、突如、眩いばかりの強い光を放って空から降下してくる「怪物」を目撃したという。ロット自身は熱波で火傷を負い、ソーヤはその怪物とともに消えてしまった。約15分後に姿を現したソーヤだったが、彼の腕

時計のカレンダーは5日後の1月30日を示しており、顔には髭が伸びていた。失われた時間については、彼自身の記憶はなかったという。怪物は他の惑星からやって来た飛行機器だと確信したロットは、現在UFOの研究に従事していることを告げる。

マヤ帝国を巡る史詩の中の物体「ラムラム」も古代人が目撃したUFOかもしれないというロットに、老人は喜んで円盤の彫り物をプレゼントするのであった。

### 1-3 恋に落ちる少女と注目を浴びる青年科学者

これをきっかけに、その後、ロットとマーガレットは心を通わせるようになる。

一方、ロットがUFOの研究をしていることは多くの人の知るところとなり、大勢の記者が彼のもとへ詰めかける。UFOとは蝶の群れの見間違いではないかという者もいるがどう思うかと問われたロットは、これまで目撃された多種多様なUFOの写真を示しながら、その飛行速度や高度、それに金属のような外表から考えて、蝶では説明がつかないとし、このように言う。「我々はまさに宇宙時代を迎えようとしている



自身と友人のUFO遭遇事件を告白するロット。



お互いに惹かれ合うロットとマーガレット。  
手を合わせて見つめるだけで……。



記者たちにUFOの写真を示しながら解説するロット。  
実際に報告されたUFO図。上段右端にアダムスキー型も。

のです。UFO の謎を解明した後、宇宙の中に人類の仲間を——別の惑星にいる高度な文明を持った科学的な生物を、見つけ出すことができるかもしれません……<sup>8</sup>」。

それを聞いた記者達は、熱狂的な喝采を送るのだった。

さらに、噂を聞きつけたゴールデン・ウール・ホテルのオーナーが、ロットが研究に専念できるよう、豪華な別荘を提供してくれた。おまけに UFO 研究の費用もすべて負担してくれるというではないか。なんでも、このオーナーも2年前に海岸で巨大な UFO を見たことがあるとのこと。ロットはその申し出を喜んで受け入れ、別荘に籠り、世間の喧騒から離れて UFO 研究に没頭することになる。

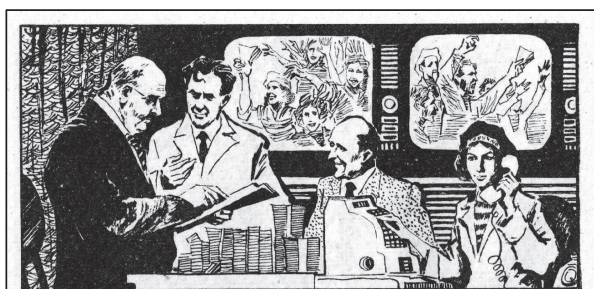
一方その頃、町中は UFO の話題で持ち切り。ロット博士がパームビーチで UFO を発見し、また出現するであろうという号外が配られていた。UFO 見物に最適なゴールデン・ウール・ホテルの最高級客室も予約中との宣伝文付きだ。争うように号外を求め、人々は熱狂した。

また、パリ・東京・ニューヨークから、UFO 目当ての外国人たちもこぞって同ホテルに宿泊。大量の外貨が流れ込み、ホテルの株もうなぎ登りに高騰したのであった。

ある日、ようやく世間の狂騒をマーガレットから聞かされたロットは、「私は何も発見していないのに！」と憤慨する。しかも、マーガレットの家は、観光用の競馬場をつくるという理由で市に接收され、彼女と祖父は立ち退かなければならなくなったという。「貧乏人にどうしろというの？」と嘆き、沈黙するマーガレット。

その夜、満室御礼で大盛況のホテルのビーチでディナーパーティを楽しむ観光客達の前に、突如、岬の向こうから青色に発光する飛行物体が出現した。皆「UFO だ！」と色めき立つ。

そのさなか、大混乱の港でモーターボートがマーガレットと祖父の乗った小舟に衝突し、祖父は落命し



25. 法郎和美元，英镑和卢比滚滚而来，流入了金羊毛公司的银库。在交易所里，金羊毛的股票被哄抬到离奇的高度。

UFO 目当ての宿泊客が国内外から押し寄せ、ホテルは大もうけでウハウハ状態。



34. 蓝色的圆盘变幻着不同的光芒，从山岬后划了一道弧线飞到海滩上空，行动看起来很平和。人们从最初的惊恐中恢复过来，庆幸自己能及时赶到棕榈海滩，目睹了这神奇的飞碟。

突如現われた UFO を目撃し、歓声を上げる観光客達。

てしまう。UFO 出現に熱狂する人々は、誰もこの少女の不幸を気に留めようともしない。

青い光は岬の裏側から弧を描くようにビーチ上空に飛来。最初は恐れおののいていた人々も、自分がタイムリーにもこの神秘の UFO を目撃できたことを喜び出すのであった。

この「パームビーチの奇跡」はセンセーショナルに報じられ、ゴールデン・ウール・ホテルは事業を拡大するに至り、市長はロットの功績を讃え、彼を表彰する。

「違う！ 私は何も発見していない！ 科学者として必要なのは観察と研究であって……」というロットの声も、熱狂した人々の歓声と拍手とにかき消されてしまう。



36. 市政厅的灯火辉煌，市长热情表彰洛特。洛特惶惶地说：“不，我没发现过什么！作为科学家，我需要的是观察、研究……”狂喜的人们用掌声淹没了他的话声。

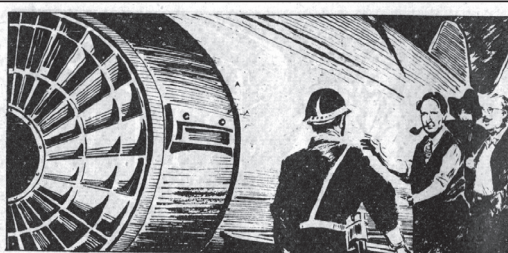
思いがけず市長から表彰され、戸惑うロット。

#### 1-4 研究室全滅！ 円盤は偽物だった！

一方、世間の UFO 騒動のせいで家も失い、祖父も失って打ちひしがれるマーガレットは、あの怪物が現われてから不幸にばかり見舞われる自分の境遇を呪いながら、いつしかかつての我が家へと足を向ける。

そこで彼女が目にしたものは、なんと人間が作った偽物の UFO だった！ しかも話している人物達の中には、ゴールデン・ウール・ホテルのオーナーと、市長までいるではないか。すべては彼らの仕組んだイカサマだったのである。

ロットに見破られそうになっていると感じた彼らは、恐ろしい計画を立てていた。気づかれる前に、今夜 0 時に行動を起こし、UFO に襲われたことにしてロットを殺し



41. 她爬到过道，听到有人在说话：“录像监视发现，洛特可能猜到这个 UFO 是假的，因为他拍的光谱照片将我们的秘密泄露了——一个神秘的宇航器决不会用这种倒霉的普通燃料！”



45. 快！要抢在零点以前！洞外恰好有一群马，她飞身上马，向别墅奔去。

UFO の正体は普通の燃料で動く飛行機。偽物だった！ ロットに危険を知らせるため、馬を駆るマーガレット。

てしまおうというものだ。市長は言う「刺激を求めるあの馬鹿ども〔観光客〕は、きっとさらにたくさん来るだろうさ!」。

この恐ろしい陰謀を知ったマーガレットは、馬を駆って<sup>10</sup>ロットの元へ走り、間一髪、彼を救い出すことに成功する。

翌朝、列車に乗ってパームビーチを離れようとする二人。乗客の持つ新聞には昨夜の UFO の襲撃を受け、ロット博士は科学に殉じたとの記事が乗っていた。

マーガレットはロットに言う。「行きましょう、オーナーはあなたを騙していたのです。私たち、別の場所できっと正真正銘の UFO を見つけられます」。

そして、最後のコマは、以下の言葉で結ばれている。

そうなのだ。ねつ造をおこなう者もいるが、世界中には崇高な目標に身を捧げる多くの人々が、いまだ不撓不屈の精神で神秘的 UFO を探求し続けている。彼らは地球が宇宙の中で孤立した存在ではなく、人類と宇宙生物とが会おうその日がきっと来ると、深く信じているのである！



49. 突然、传来一声巨响，洛特回头一看：别墅上空升起一团强烈的火光——研究室被“飞碟”炸毁了。洛特明白了这一切。



52. 是的，有人在制造骗局，但世界上无数献身于崇高目标的人还在百折不挠地探求着这神秘的 UFO，他们深信地球不是孤立地存在于宇宙之中，人类和天外生物会面的一天一定会到来！

「UFO」によって別荘の研究室ごと破壊され、ロットはすべてを悟る。

ここではないどこかで、きっと UFO を見つけようと決意を新たにす若い二人なのであった。UFO キラキラ☆

商業主義に毒された「資本主義社会」では、結局ロットは純粋に UFO を研究することができなかった。また、貧乏ながらも慎ましく生きていたマーガレットは家を奪われ、祖父も失うこととなってしまった。

そんな二人が目指す理想の世界は、どこにあるのだろうか。その行き先は明示されることなく、この物語は終わる。

## 1-5 描かれない UFO

当時の西側世界の UFO 狂想曲に中国側がどのような眼差しを向けていたか、その視点のひとつを知るという意味では、本作は興味深いサンプルであると言えるだろう。

しかし、本物の UFO や宇宙人が登場して、交流したり戦ったりといった派手な SF 的ストーリーを期待していた読者にとっては、やや肩透かしの内容であるかもしれない。UFO のイラストも目撃談を元に描かれた再現図や回想シーンでは登場するが、本編中では実際に飛来する偽物 UFO の全容がわかる描写すらない。前掲の、観光客の上を飛んでいく円盤は光に包まれておりその輪郭は判然とせず、またホテルのオーナーや市長の密談の場面でもわずかに飛行機のジェットエンジン部のようなものが見えるのみである。表紙やアバンタイトル部のカッコいい UFO イラストに魅かれて本書を手に取り、ワクワクしながら読み進めた少年少女の多くは、あるいは本編に対して軽い失望すら覚えただろう。

しかし、本作は「UFO なんて全部イカサマだ！」と主張しているわけではない。資本主義社会に起こりうる事象を揶揄しつつも、「別の場所」に行けば純粹に UFO 研究ができる可能性があるという一筋の希望を残して物語は結ばれている。実はその場所こそ、当時 UFO 研究が盛んになり始めた中国を暗示していると考えられるのだが、そのことについては後述する。以下、実際に UFO と宇宙人が描写された、夢と希望とメッセージ性にあふれた同時代の UFO 連環画を、少し眺めてみることにしよう<sup>11</sup>。

## 2. 連環画に描かれた UFO と宇宙人あれこれ

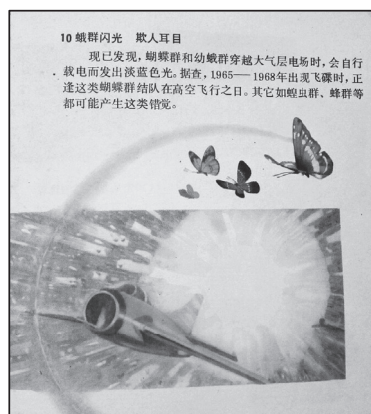
### 2-1 「飛碟」と「飛蝶」

本作の原題にも使用された「飛碟（飛ぶ皿）」は、前述の通り「Flying Saucer」の直訳である。中国語の「碟（dié）」は「蝶（dié）」と同じ発音であるため、「飛碟」は読む者・聴く者にしばしば「空飛ぶ蝶」のイメージを想起させる。

そしてまた、本作でもロットを取材する記者の言葉を借りて「UFO は蝶の見間違いではないか」と言わせているように、実際の UFO 目撃事件でも群れで飛ぶ蝶の群れを UFO と見間違えるという事例は発生している。

本作と同名タイトルの連環画、王良瑜・万煥奎画『空飛ぶ円盤の謎<sup>12</sup>』（四川人民出版社、1981）は、古今東西の UFO 事件を紹介しながらその謎に迫るドキュメント作品だが、そこにも蝶や蛾の群れが大気圏の電場を越えると自ら電気を帯びて薄青色に発光するため、UFO と見間違えたという事例が紹介されている。

また、この「飛碟」と「飛蝶」の音通に着想を得たと思われる連環画作品も存在する。



四川出版社版『空飛ぶ円盤の謎』より。蝶や蛾の群れが放つ光が、UFO と誤認される説を紹介。

それが、余克徳編文・王晓明絵画の『不思議な蝶々<sup>13</sup>』(天津人民美術出版社、1981)である。

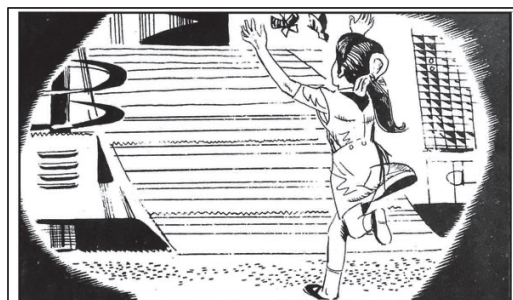
本作は、9歳の少女が宇宙人によってUFOに乗せられ、文明を持つ星々を巡る旅をする、所謂アブダクション(宇宙人による誘拐)物のSF作品。冒頭、少女は二匹の蝶を追いかけるうちに図らずもUFOに乗ることになるのだが、その蝶は彼女を引き込むために宇宙人が作ったロボットだったことが終盤で明かされる。

ちなみに本作の絵を担当した王晓明は、先の『UFO—空飛ぶ円盤の謎』では、文章と表紙絵を担当していた人物であるが、前作から一転して、本編中にバラエティに富んだデザインのUFOや宇宙人を登場させている。

それらを眺めながら、イメージの源泉を探ってみよう。



連環画『不思議な蝶々』表紙。UFOの横を飛ぶ蝶。

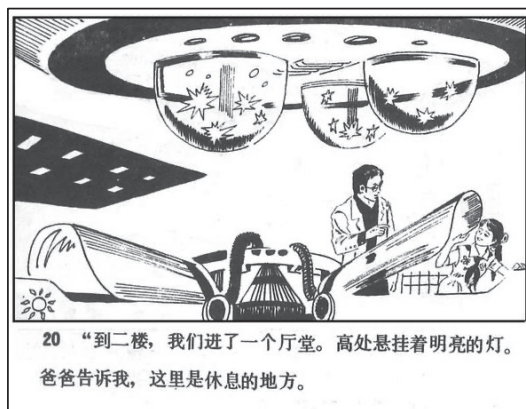


72 “‘蝴蝶在完成复制你爸爸的任务之后，又去引诱你。把你吸引到飞碟里来，让你做了一次通往球邻星的旅行。今天，你是地球上第一个访问球邻星的人。’”

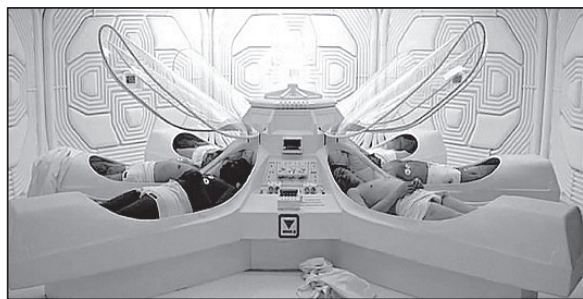
『不思議な蝶々』より。蝶が少女をUFOに誘い込む。

## 2-2 『不思議な蝶々』のUFOと宇宙人

少女の父の姿に似せて作られたロボットがUFO内を案内するシーンで、二階の「休憩室」にあるベッドが登場する。このデザインはアメリカ映画『エイリアン』(1979)に登場した、放射状に並べられた冷凍冬眠カプセルを参考にしたと思われる。



同。二階の「休憩室」。



映画『エイリアン』より。冷凍冬眠カプセル。

少女を出迎える各惑星の宇宙人たちはみなユニークな姿をしているが、みな友好的だ。最初に訪れたフォロリー（佛羅里）星人はみな巨人で、次に出会ったロンヌフ（竜努呼）星の人々はヒレを持った人魚のような姿に進化している。また、科学が進んだ惑星ソリン（索林）星の人間は腕が4本ある。さながら、中国古代の奇書『山海経』に登場する異人の国々の宇宙版といった趣である。



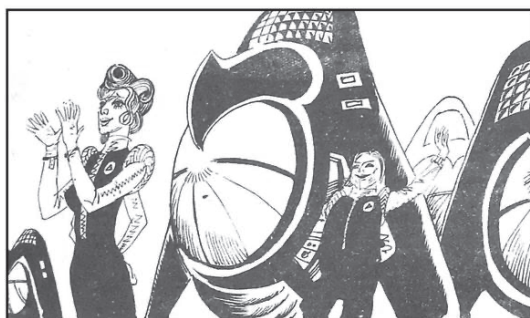
『不思議な蝶々』より。フォロリー星人。



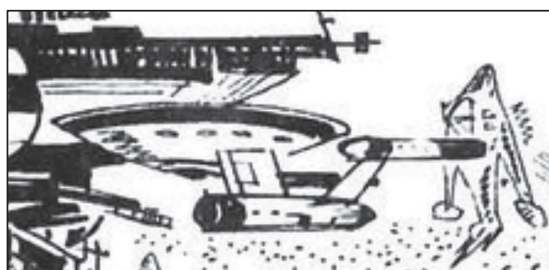
同。ロンヌフ星人。

ソリン星人は小型の飛行艇に乗って移動するが、そのデザインも秀逸だ。

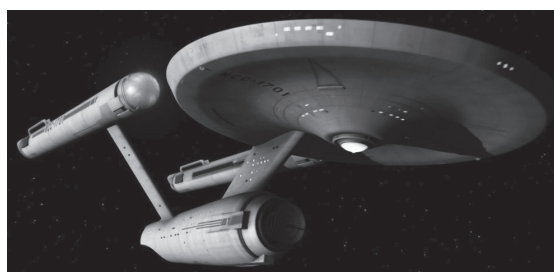
ちなみにソリン星のマーケットには、様々な宇宙船が停泊しており、その中にはアメリカのSFテレビドラマ『スタートレック』シリーズに登場したエンタープライズ号と思しきものも……。



同。ソリン星人と彼らの飛行艇。



同（部分）。ソリン星にエンタープライズ号が？



テレビ版の『宇宙大作戦（スタートレック）』（1966～）より。エンタープライズ号。

このように、同時代のアメリカ製SF作品のイメージをしばしば流用しているのも、ちょうど宇宙を舞台にしたSF映画ブームまっただ中にあった欧米の情報が大量に流

れ込むようになったこの時代ならではの。

最終的に少女は地球（いわゆる浦島効果<sup>14</sup>で地球上では 20 年が経っている）へ帰してもらい、両親との再会を喜びながら、マスコミの取材を受けて宇宙旅行の一部始終を話し、いつの日かフォロリー星人たちが地球へ来ることを願うのであった。

少女の楽しい宇宙旅行は、この世に存在する多様な人々への関心と共感に満ちており、改革開放で広い世界の情報に触れることができるようになった当時の子供たちの、飽くなき好奇心と重なるものがあるかもしれない。

### 2-3 『国王 UFO に乗る』に見る宇宙からのメッセージ

もうひとつ、UFO・宇宙人との第三種接近遭遇<sup>15</sup>物として、李樹権改編・羅楓絵画『国王 UFO に乗る<sup>16</sup>』（遼寧美術出版社、1980）を紹介したい。記載はないが原作は中国の児童文学者の包蕾による短編小説<sup>17</sup>である。

物語の舞台は架空の国家、シンサ（辛薩）国。ある日、光る円盤が領空内に突如現われ、スクランブルをかけた戦闘機も忽然と消えてしまう。

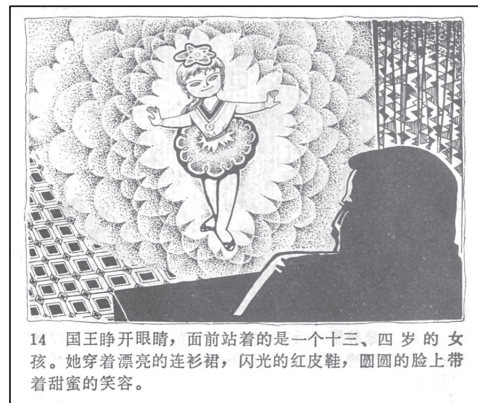
不測の事態への対応に追われ、疲弊したシンサ国のマンダーコフ（曼達可夫）国王は、酒を飲み、うたた寝をしてしまう。やがて近づく足音に目を覚ますと、13、4 歳くらいのひとりの少女が目の前に現われ、自分は UFO に乗ってやってきた宇宙人だと自己紹介を始める。

綺麗なワンピースにキラキラした赤い革靴で、愛らしい笑みをたたえた彼女の出で立ち、まさに蝶のイメージを喚起させるが、またバレリーナのようにもあり、首飾りをかけた姿は、メダルを下げたフィギュアスケート選手のようにもある。奇しくも、この連環画が発表された 1980 年は、中国が初めて冬季オリンピック（アメリカのレークプラシッド大会）に参加した年でもあった<sup>18</sup>。中国は惜しくもメダル獲得はなかったが、あるいはその時に中国の人々が眼にした外国人選手のイメージが、この異星人の少女に投影されているのだろうか。

頭頂部に付けた「原子力マーク」そのものの髪飾り<sup>19</sup>も意味深である。

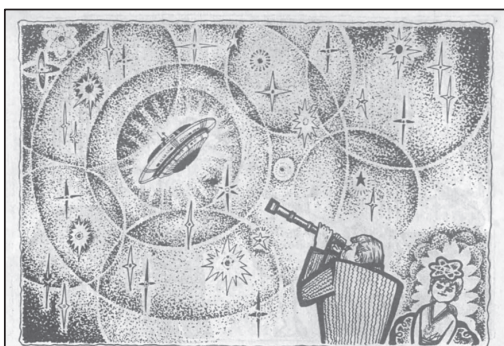


連環画『国王 UFO に乗る』表紙。



14 国王睁开眼睛，面前站着的是一个十三、四岁的女孩。她穿着漂亮的连衣裙，闪光的红皮鞋，圆圆的脸上带着甜蜜的笑容。

『国王 UFO に乗る』より。少女型宇宙人現わる！  
頭には原子力マーク（原作では蝶結びのリボン）。



18 国王拿起望远镜望去，只见夜空中停着一个巨大的象碟子一样的怪物，发出五彩夺目的光，照亮了半个天。他惊呼起来：“飞碟！”女孩点了点头。



22 “你们来了多少人？去过别的国家吗？有核武器吗？”国王问。女孩告诉他：“来了三个孩子，没去过别的国家，没有核武器，只有一种消灭核武器的粉末。”

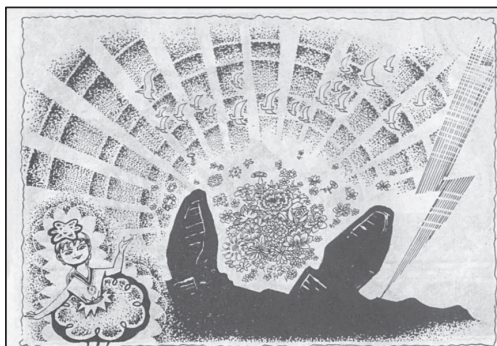
同。少女に手渡された望遠鏡で UFO を見る国王。

同。彼女の星には核を消滅させる粉末があるという。

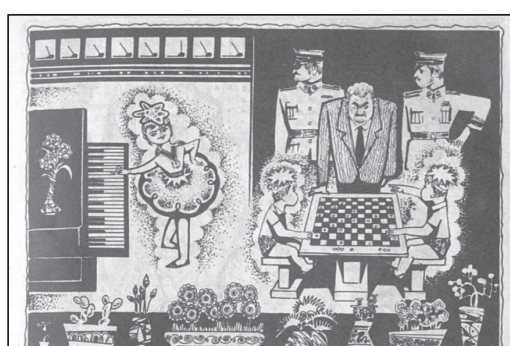
実は、彼女達はあらゆる星との友好のために送られた「児童宇宙調査隊」で、今回は地球人を UFO にお招きしたいとのことだった。彼女達の星の科学は進んでおり、核兵器を消滅させる粉末があると聞いた国王は、事前に部下達と共謀し、UFO に乗船してそれを奪ってしまおうとたくらむ。さらには UFO を利用して全世界を征服するつもりであった。

科学顧問のヤヤイエフ（耶耶也夫）、軍事大臣のフリスキー（胡里斯基）を伴い UFO に乗り込んだ国王を出迎えたのは、例の少女と、ふたりの少年。国王達がまず見せられたのは、ある星の歴史を伝える映画だった。世界征服をたくらんだ将軍が戦争を起こしたが、最後に将軍は自らの作った新型武器によって死に、その星はさらに素晴らしくなったというお話である。

その後、機器の一切ない操縦室に案内された国王達は、この UFO は少女がピアノを弾くことで飛ばすことができるシステムであると知る。そこで態度を豹変させた国王は、拳銃で少女を脅し、言う通りに UFO を飛ばすようにと命令する。



36 电影开演了，这是一部历史片。剧情大致是讲：有个将军要霸占整个星球，因而爆发了一场大战，最后，那个将军死在自己制造的新型武器下。战争结束了，那个星球依然存在，而且更更好了。



41 国王吃惊地问：“没有机器，你们怎样驾驶呢？”两个男孩指着屋里的一架钢琴和女孩说：“你让她弹起琴，飞碟就会按曲调起飞。”

同。ある星の歴史を描いた映画を見せる少女。

同。UFO は少女がピアノを弾くことで操縦できる。

この、ピアノで巨大な飛行物体を動かすというアイデアはなかなか面白いが、同じシステムは手塚治虫『鉄腕アトム』の「人工太陽球」の巻（初出は1959~60<sup>20</sup>）で採用されている。『鉄腕アトム』の中国でのテレビ初放送が1980年12月<sup>21</sup>、同連環画版第1巻の発売は1981年5月<sup>22</sup>であり、いずれも包蕾の原作発表（1979年）後になるので直接の影響関係はわからないが、作者は何らかの形でアトムのエピソードに触れていた可能性もある。

さて、UFOを向かわせる先を訪ねられた国王は、「ミーシン（米星）国だ」と伝える。しかし、国王達の陰謀などにつくに察知していた少女は、「TW光線」で拳銃さえも無効化する。最終的に昏倒した国王は送り返され、王宮の自室ソファで目を覚ます。これまでの出来事は夢か現実か……。ぼんやりと考える国王の姿を描いて物語は終わる。

ミーシン国は架空の国名であるが、シンサ国の登場人物が皆ロシア人のような名前であることを考えると、当時ソ連と敵対していたもうひとつの大国、アメリカが想起される。核兵器とその無効化を実現する新兵器がテーマになるあたり、当時の東西冷戦を改めて意識させられる展開である<sup>23</sup>。



43 两个男孩笑嘻嘻地举起手，女孩从容地坐在钢琴旁，有礼貌地问：“国王陛下！要往哪儿飞？”“米星国！”国王命令她。

同。拳銃で脅し、UFOをミーシン国へ向かわせる。



『鉄腕アトム』「人工太陽球」より。ピアノを演奏することで人工太陽球を操縦するアトム。



47 国王和大臣们连忙察看，发现枪筒的口子粘在一起，已经不能用了。



54 “这究竟是梦还是真事？”他想打电话问问科学顾问，但脚冻麻了。他只好静静地坐在那里，想着……

『国王 UFO に乗る』より。銃を無効化された国王達。

同。目覚めた国王。見たものは夢か現実か……？

同時代に作られた、それぞれに特徴的な三作品を紹介してきたが、UFO や宇宙人への直接的な関心もさることながら、そのいずれにも 1980 年代初期の中国社会から「外の世界」へ向けられた視線といったものを感じることができる。

あるものは拝金主義・商業主義が蔓延る世界では純粋な UFO 研究さえも金儲けの道具にされてしまうという事実を風刺し、あるものは高度に発達した文化・文明を持つ異世界の人々への憧憬と好奇心とを描き、またあるものは冷戦下の軍事大国のエゴを揶揄しつつ、兵器のない世界を実現した人々を理想の姿として称揚する。

それを、当時西側社会から流入し始めたばかりの SF・アクション映画や漫画など、「外の世界」の様々なイメージを取り込みながら描いたのがこれらの UFO 連環画なのであった。

### 3. 現代中国を飛ぶ UFO たち

#### 3-1 円盤が来た！～現代中国の UFO 報道

さて、前述の通り、これらの連環画作品は現代中国において広く UFO の存在が知られるようになり、ちょっとしたブームとなっていた時期に作られたものである。最後に少し、その背景となる当時の UFO 報道を眺めてみよう。

UFO という存在が世界に知られるきっかけとなった 1947 年のアメリカで起こったとされる所謂「ケネス・アーノルド事件」<sup>24</sup> 直後、民国時代の中国でもそれに触発されたと思われる UFO 騒動は賑やかだったが<sup>25</sup>、中華人民共和国成立以降、初めて現代的な意味での「未確認飛行物体＝UFO」が公的メディアで報道されたのは、1978 年 11 月 13 日『人民日報』の記事、「UFO——ある不思議な世界の謎」といわれる<sup>26</sup>。これは、「ケネス・アーノルド事件」から近年までの世界の有名な UFO 目撃事件を紹介したものだったが、中国共産党の機関誌である『人民日報』が報じたこの記事がきっかけとなり、その後、大陸では UFO ブームが巻き起こったという<sup>27</sup>。



『人民日報』1978 年 11 月 13 日記事。引用されている UFO 写真は、日本の『週刊読売』（同年 9 月 10 日号）からの転載。

さらに、1980年2月18日『光明日報』は「天外からの来客」は早くに中国に来訪していたのではないかと<sup>31)</sup>と題する記事を掲載。北宋・沈括『夢

『光明日報』1979年9月21日記事。

『光明日報』1980年2月18日記事。

溪筆談』(9世紀)に収める怪光の話など、中国の古文献に見える未確認飛行物体の記述を取り上げている<sup>32</sup>。

1980年8月23日、中国でUFO研究が始まって以来、初めてのUFO写真が北京で撮影され、同年11月5日の『北京晩報』に掲載された。

1980年11月20日『文匯報』に、「中国でUFO研究始まる<sup>33</sup>」なる記事が掲載される。これは、中国のUFO研究の現状を報じた初の記事とされる。

とにかく、お堅いはずの『人民日報』が報じた1978年の記事を皮切りに、1980年に至るまで、UFO報道は新聞紙上を賑わしていたことがわかる。

### 3-2 相次ぐUFO研究会の設立と雑誌や書籍の発行

新聞報道で火がついた中国のUFOブームは、ついに専門誌の発行に至り、雨後の筍のごとく各地に多くの研究会を生み出すこととなる<sup>34</sup>。

1979年9月20日、武漢大学に中国初の民間のUFO学術研究団体である中国UFO愛好者連絡所が設立された。

以降、1980年代のUFO研究を巡る動きを見て見よう。

1980年5月1日、中国UFO愛好者連絡所が中国UFO研究会に改称。

1980年6月、広東UFO研究会、設立。

1981年2月25日、甘肅出版社より、中国初のUFO専門雑誌『飛碟探索』<sup>35</sup>が創刊される。休刊時期をはさみながらも、2021年現在まで発行され続けている老舗雑誌だ。

1981年4月15日、上海UFO研究会、設立。

1981年8月15～20日、武漢において中国UFO研究会の第1回全体会員代表大会が挙行され、全国14の省・市の会員26名が集まる。

1981年9月、湖北武漢UFO研究会、設立。

1982年4月21日、雲南「文山州」UFO研究会、設立。

1984年2月、昆明映画製作廠と『飛碟探索』編集部、寧夏UFO研究会、雲南UFO研究会の共同制作映画『飛碟在中国』<sup>36</sup>を製作。

1984年9月23日、済南UFO研究会準備委員会、設立。

1984年11月30日、大連科学協会の批准を経て、大連UFO研究学会、設立。

1985年2月、黒竜江UFO研究会、設立。

1985年3月28日、山西UFO研究会、設立。

1985年9月6日、成都科学協会の批准を経て、成都市UFO研究会、設立。

1986年5月31日、四川省科学協会の批准を経て、四川豊都UFO研究会、設立。

1986年10月15日、青海西寧UFO研究会、設立。

1987年4月2日、貴州UFO研究会、設立。

1987年5月8日、青海「果洛州」UFO研究会、設立。

1987年5月22日、遼寧青年 UFO 愛好者協会、瀋陽にて設立。

1987年10月、江蘇崑山 UFO 研究会、設立。

まさに「UFO 研究ブーム」といった様相を呈している。

これらの研究会は皆、基本的に民間の愛好家団体ではあるが、会員には天文学者などの研究者も多く、独自に目撃情報を収集したり考察したり、それぞれの研究会同士での交流もおこなっていた。

当時の中国は、改革開放政策開始直後であり、最大の研究団体である中国 UFO 協会は、アメリカ・イギリス・フランス・日本といった海外の研究者とも積極的に交流を持っていたようである<sup>37</sup>。

また、雑誌『飛碟探索』誌は国内に 40 万の読者を持ち、日本の南山宏<sup>38</sup>・並木伸一郎<sup>39</sup>と資料交換の協定を結んでいるのだという<sup>40</sup>。1985 年に取材を受けた同誌の編集長・朱福錚（当時 39 歳）はこのように語っている。

UFO の謎は我々の世代、あるいは次の世代にも解くことができないかも知れません。しかし、いずれは解明されることを私は信じています。われわれの研究は、のちのちの研究のために道を拓く仕事にすぎませんが、これは意義のある仕事で、けっしてゆるがせにすることはできないのです<sup>41</sup>。

UFO への飽くなき好奇心と純粋な探求心が伝わってくるではないか。

本稿で扱った連環画『UFO——空飛ぶ円盤の謎』の初版発行は、1980 年 1 月ということなので、中国初にして最大の民間 UFO 学術研究団体、中国 UFO 研究会の前身である中国 UFO 愛好者連絡所の発足（1979 年 9 月）直後の作品ということになる。まさに、中国における UFO フィーバーの出発点といってよいだろう。

その後、1980 年代に UFO 研究の気運が高まり多くの研究団体が生まれた中国大陆に、はたしてロットとマーガレットが心穏やかに研究生活を送れるような場所があったらどうか……。

### 3-3 未知の世界との遭遇

1970 年代末から中国でこのような UFO 研究や海外との交流活動が盛んになったのは、もちろん文化大革命が終焉を迎え、報道内容にもある程度幅が生まれていたことと、改革開放路線に舵を切ったことが大きい。湖北省神農架で未確認動物（UMA）〈野人〉目撃談が相次ぎ、最初に国家レベルの調査隊が組織されたのが、UFO 騒動



黄万波ら編著『世界四大怪』（天津科学技術出版社、1981）表紙。

とほぼ同時期の 1976 年。最後の調査隊が送られた 1980 年には、〈野人〉を巡る報道が中国内外に広く配信された。中国 UFO 研究会と同様の民間研究団体「中国〈野人〉調査研究会」が発足したのは、1981 年のことだった。また、1980 年は吉林省にある長白山のカルデラ湖天池に水怪の目撃報告が相次ぎ、話題になった年でもあった<sup>42</sup>。いずれも影響の大きい『人民日報』『光明日報』といった共産党の機関誌や、『北京晩報』はじめ各新聞が記事として何度も取り上げている。

特に、UFO と先述の〈野人〉（ヒマラヤの雪男イエティやアメリカのビッグフットを含む）、それにネス湖のネッシーとバミューダ三角地帯を加えた 4 つは、中国語でよく「世界四大怪」と称され、人々の好奇心を掻き立てた。

その呼称を書名に冠した初期の関連書籍である黄万波等編著『世界四大怪』（天津科学技術出版社、1981）の前言には以下の言葉がある。

今日の世界においては、国家科学院から青少年のアマチュア科学愛好家に至るまで、みな「四怪」の謎を解明するために懸命に活動しており、既に国際的な科学競争の場を形成し、誰が最初にこの「自然の謎」を解き明かすことができるかに注目している。わが国の領土は広大で、人口も多く、自然環境も豊富で多様であり、四つの現代化の実現のため努力している今日にあって、我々もまた必ずや雄大な心を抱いて大志を立て、「自然の謎」解明の競争の中、先を争ってトップに立ち、人後に落ちることはないであろう。筆者は上述のような思いを抱き、本書を編んだのだが、その目的はさらに多くの人々の視界を開き、未来を展望し「謎」の解明に献策をおこない、力を与えることに貢献し、国のために栄光を勝ち取る場所にあるのである<sup>43</sup>。

約 10 年間の文革の後に、中国の人々がようやく目にした海外の様々な文化は刺激にあふれていたに違いない。彼らが国外へ向ける食欲で好奇心いっぱいの眼差しのさらにその延長線上には、その外国社会においてもいまだ謎の解けない存在であった UFO や UMA といった未知の世界が広がっていたのかもしれない。

## おわりに

賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督の映画『帰れない二人』（2018）の物語終盤、服役を終えた主人公の女性チャオチャオが仕事を探して列車で西へ向かい、そこで乗り合わせた男が、新疆での UFO 観光<sup>44</sup>で一儲けを持ちかけるシーンがある。時代的には 2000 年代、神農架や長白山天池では未確認動物を利用した観光プロモーションがおこなわれ始めた頃でもある。中国大陆においても、UFO は商業主義の道具となってしまったのだろうか。結局、チャオチャオは男とは行動を共にせず、新疆のある駅でひと

り下車するのだが、何とそこで夜空をまばゆい光を発しながら飛び去る UFO を目撃する。それまでの映画のトーンとは全く異なる唐突な UFO の登場だが、その後、劇中では何の説明もされず、あれはチャオチャオの夢だったのか、現実だったのか判然としないまま、物語は終わっていく<sup>45</sup>。



映画『帰れない二人』（2018）より。

また、張芸謀（チャン・イーモウ）製作総指揮の『愛しの故郷（ふるさと）』は、中国の五つの地方に住む人々の郷土愛やそれにとまなう悲喜こもごもを描いたオムニバス映画だが、その中の一篇、陳思誠監督作「空から落ちてきた UFO」は、貴州省の山村に現われた UFO<sup>46</sup>を使った村興しがテーマのコメディである。取材に来た国営放送の科学番組のディレクターらを案内する村人達。しかし、件の UFO は村思いの発明家が作った偽物だったというお話。

連環画『UFO—空飛ぶ円盤の謎』では批判的に扱われた UFO の観光資源化問題だが、現代中国では、やはり UFO も経済活動と無縁ではいられないということなのかもしれない。

その一方、2021 年現在、中国人作家による SF 小説やまたそれをもとにした SF 映画が大きなブームとなっている。劉慈欣『三体』の中国内外でのヒットに見るように、やはり今も地球外生命体との接触は人々の心を動かすテーマのひとつであるのも事実だ。物語の中に、それぞれの時代の社会問題等を反映させながら、これからもおそらく「未知との遭遇」譚は編まれ続けていくに違いない。



オムニバス映画『愛しの故郷』（2020）の一篇「空から落ちてきた UFO」ポスター。

<sup>1</sup> 原題「UFO——飞碟之謎」。原作小説の存在については不明。

<sup>2</sup> 1974 年の「ケネス・アーノルド事件」（後述）以降、未確認飛行物体を差す言葉として使われ始めたもの。

<sup>3</sup> 所謂「テヘラン UFO 交戦事件」。実際は 1976 年 9 月 19 日の出来事とされる。

<sup>4</sup> 原文は以下の通り。「人们不断地发现这种飞行怪物，仅美国，目睹的就有 500 多万人。人们称这怪物为“飞碟”，即 UFO。世界掀起了一股“飞碟热”。

<sup>5</sup> 原文は以下の通り。「许多年来，“飞碟”这个神秘的东西，哄动了世界上许多国家。无数科学家都在探

求这个神秘的“天外来客”的真相：它是有，是无？到底是什么东西？这个问题引起了全世界的兴趣。本书主要是通过故事内容反映这个神秘怪物出现以后，在资本主义社会引起怪现象的一个侧面，同时对飞碟也提供了一点有关历史资料」。

- <sup>6</sup> 本稿の初稿チェック時に、田村容子氏より本作におけるロットの造形がデビッド・ボウイに似ているとのこと指摘をいただいた。その細面で彫りが深く、憂いを帯びた顔立ちと髪形は、なるほどボウイの面影がある。ボウイは1976年にイギリスのSF映画『地球に落ちてきた男』で宇宙人を演じており、同作は中国では公開されていないものの、何らかの媒体を通じてキャラクター造形の参考にされた可能性も考えられる。
- <sup>7</sup> マヤ文明とUFOを巡る言説としては、当時の石棺に描かれた「宇宙飛行士」に見える彫り物などが有名で、古代マヤが地球外文明と接触していたなどとして取り上げられることは多いが、本作で語られるUFOを旗印にした話の由来については不明。
- <sup>8</sup> 原文は以下の通り。「我们正面临着一个宇宙时代，当飞碟之谜解开之后，很可能找到宇宙中人类的同伴——另一个星球中高度文明科学的生物……」。
- <sup>9</sup> 原文は以下の通り。「准保那些寻求刺激的傻瓜会来的更多！」。
- <sup>10</sup> ヒロインが馬を駆ってさっそうと主人公の危機に駆けつけるという描写は、1978年に中国で公開されて大ヒットとなった高倉健主演の映画『君よ憤怒の河を渉れ』（佐藤純彌監督、1976）における真由美（中野良子）のイメージが重ねられていると思われる。巨大な陰謀によって葬り去られようとする主人公を救うためというその動機も、同じものである。
- <sup>11</sup> 本稿では1980年代の連環画作品を取り上げているが、宇宙人が登場するSF連環画自体は、既に民国期にも生まれている。たとえば、火星における核戦争を描いた連環画を紹介した武田雅哉『『火星大情人』を欣賞する——異星の核戦争をテーマにした結末不明の怪作』（『連環画研究』第4号、2015年2月、所収）参照。
- <sup>12</sup> 原題「飛碟之謎」。本稿で紹介している作品とは同名の別作品。
- <sup>13</sup> 原題「奇异的蝴蝶」。
- <sup>14</sup> 高速に近い速度で移動した場合、地球上に比べて時間の進み方が遅くなるので、帰還した際には長い時間が流れることになる。このことを、昔話の「浦島太郎」になぞらえて命名したもの。
- <sup>15</sup> UFOや宇宙人との接触を、第三段階に分けたもの。第三種接近遭遇は、UFO搭乗員と接触した場合を指す。元アメリカ空軍のUFO研究部顧問ジョーゼフ・アレン・ハイネックがその著書『*The UFO Experience: A Scientific Inquiry*』（1972）で提唱した用語。アメリカのSF映画『未知との遭遇』（1977）の原題（*Close Encounters of the Third Kind*）ともなっている。
- <sup>16</sup> 原題「国王上飛碟」。
- <sup>17</sup> 原作小説タイトルは「国王登上了飛碟」。初出は『少年文芸』第5期（1979）。同作は包蕾『包蕾童話近作選』（湖南少年兒童出版社、1983）、張錦江主編・任哥舒副主編『對包蕾先生的念想与敬意 包蕾紀年文集』（上海文芸出版社、2019）等に収められている。
- <sup>18</sup> ちなみに、同年の夏季オリンピック（ソ連のモスクワ大会）は、中国はアメリカや日本と同様にボイコットしている。中国が夏季オリンピックに復帰したのは1984年、アメリカのロサンゼルス大会だが、同大会はソ連がボイコットしている。まさに、時代は東西冷戦真っただ中であつた。
- <sup>19</sup> なお、連環画版の文章では省かれているが、包蕾の原作小説における髪飾りは「頭にはピンク色のリボンをつけている（头上扎着粉红色的蝴蝶结）」と描写されており、ここにも蝶々のイメージが重ねられていることがわかる。これを原子力マークにしたのは連環画版のアレンジであると思われる。
- <sup>20</sup> 初出は漫画雑誌『少年』（光文社）1959年12月号～1960年2月号、今回は1999年の秋田書店サンデーコミックス版第5巻所収のものを参照した。
- <sup>21</sup> 1980年12月7日に中央電視台で『鉄腕アトム』の第1話が放送されている。関中阿福、羅星海『童話往事 中国訳制動画面（1979-1987）』（中国伝媒出版大学社、2017）参照。
- <sup>22</sup> 科学普及出版社から1981年5月に刊行されている。ただし、これは原作者の許諾なく、漫画を連環画サイズに強引に合わせて編集した横長タイプのもの。
- <sup>23</sup> 当時のSFやミステリにおける仮想敵の設定の多くには、その時の中国の国際関係が大いに反映されている。詳しくは武田雅哉、林久之『中国科学幻想文学館（下）』第二章・第五章参照。
- <sup>24</sup> 現代UFO神話のすべての始まりとなった「ケネス・アーノルド事件」とは、1947年6月24日、アメリカ人実業家のケネス・アーノルドが、ワシントン州レーニア山上空を自家用機で飛行中、高速で飛行する9つの物体を目撃した事件である。事件はすぐさまマスコミによって大きく報道され、やが

て世界にも UFO ブームが巻き起こった。

この際、証言をしたアーノルドが「水面を水切りするコーヒー皿のような動き」と表現した言葉が、報道の中でその物体の形状と誤解され、「Flying Saucer（空飛ぶ円盤）」という名称が誕生することとなる。

<sup>25</sup> 中華民国時代の UFO 騒動については、武田雅哉『中国飛翔文学史 空を飛びたかった綺態な人たちにまつわる十五の夜嘶』（人文書院、2017）所収の「第十四夜 何かが空を飛んでいる」に詳しい。

<sup>26</sup> 原題「UFO——一个不解的世界之谜」。執筆者は沈恒炎。

<sup>27</sup> 1981 年に創刊された中国の老舗 UFO 専門誌『飛碟探索』編集部による『UFO 事典 天外来客之魅影追踪 [中国編]』（敦煌文芸出版社、2015）では、「これが中国の新聞が初めて公に UFO を紹介したもので、これ以降、UFO ブームが巻き起こったのである（原文：这是中国报纸第一次公开介绍 UFO，从此掀起一个 UFO 热潮）」と位置づけている（同書 309 頁）。なお、同記事の全文を邦訳したものが、日本の UFO 専門誌『UFO と宇宙』1979 年 3 月号の記事「中国に見る UFO 観 人民日報に UFO 登場」（同誌 26-27 頁、翻訳者は城端三郎）に掲載されている。

<sup>28</sup> 原題「“飞碟”存在吗?」。執筆者は鄒新炎。なお、同記事の邦訳は『UFO と宇宙』1980 年 8 月号の記事「中国ナンバー 2 新聞「光明日報」UFO レポートを初掲載!」（翻訳者は山本一吉）に収録されている。

<sup>29</sup> 1974 年以降、湖北省神農架林区で目撃報告が相次いだ半人半獣の未確認動物。1976～1980 年にわたって中国科学院による国家レベルの調査隊が現地へ派遣され、中国内外で話題となった。現代まで続く神農架（野人）騒動については、拙著『中国「野人」騒動記』（大修館書店あじあブックス、2002）を、その事件の謎解きについては『UMA 事件クロニクル』（彩図社、2018）所収の拙稿「野人（イエレン）」の項をご参照いただきたい。その他、初期の騒動についての考察は、中野美代子『中国の妖怪』（岩波新書、1983）に詳しい。当時実際に調査隊に同行した日本のフジテレビスタッフによる、宇留田俊夫・南川泰三『野人（イエレン）は生きている——中国最後の秘境よりドキュメント』（サンケイ出版、1981）が、当時の調査隊内部の事情を知る上で貴重な資料となっている。また、様々な現代中国の〈野人〉譚を収録したものに、周正著・田村達弥訳『中国の「野人」 類人怪獣の謎』（中公文庫、1991）がある。劉民壮『中国神農架』（文匯出版社、1993）は、長年現地で〈野人〉調査に携わってきた生物学者による研究結果の集大成である。

<sup>30</sup> 原文は以下の通り「刚才飞经他们头顶的东西是圆形的，看起来有小脸盆大，发出黄白色亮光，一边慢悠悠地旋转，一边往前飞，速度不快。它的边缘沿切线方向喷出火苗，没有听见小响声。目击时间大约一分钟」。

<sup>31</sup> 原題「“天外来客”莫非早已莅临中国」。執筆者は張龍樵。

<sup>32</sup> 同記事で主に取り上げられているのは、その後、多くの中国の UFO 関連本でも古代の目撃例として引用されるようになる北宋の沈括『夢溪筆談』巻二十「新奇」、巻二十一「異事」に載せる天に現われた怪光の記述である。今にして思えば、あれは UFO だったのではないかというわけであるが、このように古典籍の記述を引用してその実在を補強する論法は、前述の〈野人〉など未確認動物事件の事例でもよく見られる。しかし、そのほとんどはこじつけである。

なお、『夢溪筆談』をはじめ古代の UFO 事件として頻繁に挙げられる文献に逐一当たり、実際の記述を丹念に検証し、客観的な事実を積み上げて批判的に考察した論文に、明木茂夫「古代中国に UFO は飛来していたか?——古典文献の基本的な使い方からの考察——」（其一）（『教養論叢』第 42 巻 4 号、中京大学教養部、2002、所収）、同（其二）～（其五）（『文化科学研究』第 13 巻 2 号・第 16 巻 1 号・第 17 巻 2 号・第 28 巻 1 号、中京大学教養部、2001・2004・2005・2017、所収）がある。ぜひ参照されたい。

<sup>33</sup> 原文は以下の通り。「中国开展 UFO 研究」。

<sup>34</sup> 以下に挙げるデータは、前述『UFO 事典 天外来客之魅影追踪 [中国編]』による。

<sup>35</sup> 『飛碟探索』誌の詳しい内容と中国の UFO 研究を紹介した早期の日本語記事としては、『人民中国』1985 年 9 月号（『人民中国』社・東方書店）掲載記事、曹復「「飛碟探索」——中国からの UFO 報告」がある。

<sup>36</sup> 同映画は、日本でも 1985 年 3 月に茨城県で開催中だった「つくば科学万博」にも出品されたそうである（前掲『人民中国』1985 年 9 月号に記載あり）。当時茨城県在住の中学生だった筆者も何回か万

博へは行ったのだが、残念ながら未見……。

- <sup>37</sup> 前掲『人民中国』では同研究会について、以下のように記述している。「この研究会は、アメリカ、イギリス、フランス、日本の研究者、たとえばアメリカの天文学者で UFO 研究の世界的権威、アレックス・ハイネック氏、アメリカの宇宙開発部の専門家、リチャード・ハイネス氏、フランスの天体物理学者、アイル・グラン氏、日本の UFO 研究家、南山宏氏といった UFO 研究の知名人とも交流をおこなっている」とある。同誌 43 頁。
- <sup>38</sup> SF 作家・翻訳家。超常現象に関する著作を多く持ち、未確認動物を表す和製英語 UMA (Unidentified Mysterious Animal) の名付け親である（ただし本人は用いず、広めたのは動物学者の實吉達郎）。
- <sup>39</sup> 作家にして超常現象研究家。膨大なオカルト関連の著作がある。UFO 研究においても、早くに日本宇宙現象研究会や日本フォーティアン協会を設立して活動している。
- <sup>40</sup> 前掲『人民中国』43 頁。
- <sup>41</sup> 前掲『人民中国』44 頁。
- <sup>42</sup> 詳細は、拙稿「長白山「天池怪獣」の形態学」『饕餮』第 14 号、中国人文学会、2006 所収）参照。正体の謎解きについては、前掲『UMA 事件クロニクル』所収の拙稿「天池怪獣（チャイニーズ・ネッシー）」を参照。
- <sup>43</sup> 原文は以下の通り。「今天在世界范围内，从国家科学院到青少年业余科学爱好者，都在为揭开“四怪”之谜而辛勤地工作着，已经形成了一场国际性的科学竞赛，看谁能首先揭开这“自然之谜”。我国疆域辽阔，人口众多，自然环境丰富多样，在为实现四个现代化而努力的今天，我们也一定能够树雄心，立壮志，在揭开“自然之谜”的竞赛中，争先夺魁，不落人后。笔者怀着上述心情，编著了此书，其目的就在于让更多的人大开眼界展望未来，在揭“谜”中献计献策，贡献力量，为国争光」。同書冒頭、前言頁。
- <sup>44</sup> このシーンの時代設定は 2006 年だが、実際に 2005 年 9 月 8 日には新疆のカナス湖周辺に UFO が出現し、写真に撮られるという事件が報告され話題となっている。本作における「UFO を使って一儲け」というのは、当時のそういった騒動を受けての描写と思われる。郭之文主編『「走近科学」精選叢書 中国 UFO 懸案調査』（上海科学技術出版社、2020）参照。
- <sup>45</sup> 賈樟柯監督は、日本のウェブ版『クリスチャン新聞』（2019 年 8 月 27 日）の取材で、劇中の UFO 描写について以下のように語っている。「新疆の駅に降り立った時のチャオチャ [ママ] は、非常に複雑な心理状態になっています。それまでの父親との関係、恋人ビンとの関係、そして裏社会の義兄弟たちとの関係など絶えず複雑な人間関係のなかに置かれて、それら进行处理することに必死に生きてきました。その中で、自分を大事にして、自分を感じるということがほとんどなかった。だが、新疆に着いて満天の星空に UFO が飛来してきたのを見たということは、彼女自身の世界がそこにあるということ、自分の生き方があることを自分自身で感得でき信じられるということを表現したかったのです。そのシーンにきて宇宙との関係にも非常に興味を憶えて、描いてみたいと思いました」。
- URL: <https://xn--pckuay0l6a7c1910dfvzb.com/?p=24884>
- <sup>46</sup> これは 1994 年 11 月 30 日、実際に貴州省貴陽市郊外の造林地で起こったとされる UFO 出現事件をモデルにしている。前掲『「走近科学」精選叢書 中国 UFO 懸案調査』参照。